



Title	最近の発達心理学の動向と課題 : 発達観について
Author(s)	仲, 真紀子
Description	Part 1. 発達心理学の基礎を学ぶ. 総論.
Citation	月刊地域保健, 28(6), 5-12
Issue Date	1997-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44795
Type	journal article
File Information	GCH28-6_5-12.pdf



PART 1 発達心理学の基礎を学ぶ

総論

最近の発達心理学 の動向と課題

発達観について

千葉大学教育学部教育心理学
助教授

仲 真紀子



1 二つの発達観…ゲゼルとワトソン

今から半世紀ほど前、小児科医のゲゼルは乳幼児の発達について次のように言いました (Gesell, B. A. 「乳幼児の発達と指導」1943)。

「子どもの人格(パーソナリティ)はゆつくりと徐々に、成長してゆくことによってつくられていくものである。

神経系統は一段一段と自然の順序を追って成熟してゆく。立つ前にえんこ、話しことばの前には喃語、本当の

ことを話す前にはつくり話をし、四角が描けるようになる前に円が描ける。

他人を思いやる前には利己的であり、まず他人に頼った後、自分に頼ることができるようになるのである。どんな能力でもみな、道徳でさえも発達の法則に従っている」

子どもの発達が、生得的に決定された青写真に従って徐々に展開してゆくという考え方を成熟説と言います。成熟説に立つゲゼルは、「育児という仕事は前々からきめておいた型に子どもを無理にはめこむことではなくて、子どもの成長をみちびくことである」と言いました。

一方、人の学習を「刺激と反応の連合」で説明しようとしたワトソンは次のように書いています (Watson, J. B. 「行動主義」1924)。

「私は、さらに一步を進めてこう言いたい。『私に健康でいい身体をした一ダースの赤ん坊と、彼らを育てるための私自身の特別な世界を与えて下さい。そうすれば私は、そのうちのどれか一人をランダムに取り上げて、その子を訓練し、私が選んだある型の専門家に一医者、法律家、芸術家、大商人、そして乞食や泥棒さえもきつとしてみせましょう。彼の才能、好み、性向、能力、適性や祖先の人種にはかわりなしに』」。

こういつた、環境からの働きかけこそが重要なのだという考え方を経験主義と言います。ワトソンは、どのような子どもでも、適切な環境を与えることによって、思うような職業につかせてみせると言いました。

ゲゼルとワトソンのどちらが正しく、どちらが誤りということはありません。働きかけによって伸びる側面もあれば、内的な準備が重要な発達の側

面もあるでしょう。ただ言えるのは、どのような発達観をもつかによって、

2 現代の発達観

現代の育児観はどのようなものでしょうか。大方の育児書は、成熟説にもとづいて何歳になると何ができる、というような記述をしているのではないかと思います。このような発達観には、発達心理学者ピアジェの影響が強く働いていることは否めません。

ピアジェは、乳幼児の発達を表1のように、四つの段階および六つの下位段階で記述しました。ピアジェの理論の特徴は、

(1) 乳幼児の思考の形態は、知識や語彙の増加などの量的な変化にとどまらず、質的に変化する

(2) 変化するのは、例えば菱形が書けるようになるというような局所的な行動特徴ではなく、それらすべてに関わ

る乳幼児に対する働きかけは大きく異なるだろうということです。

る一般的な知能の構造である

(3) その変化は、生物学的な発達に裏打ちされた普遍的なものであるということです。

このような見方によれば、乳幼児の発達は普遍的で、定まったものだということになるでしょう。また観察される中心的な特徴は、他の関連する知的技能の発達にも強く関わってくるのだと理解されます。

たとえば言語の獲得に関しては、生後一八ヶ月頃になると複数の感覚運動的な行動様式(シエマ)が協調的に用いられるようになり、やがて内化し、シンボルの使用が可能になる。そうなると遅延模倣(観察したことがらを一定の時間がたった後、再現できる)や

表1 ピアジェによる認知発達の段階 (Crain, 1981 による)

I 期：感覚－運動期 (誕生～2 歳)	赤ん坊はこの時期を通じて身近な環境に関わり、吸う、把む、叩く等、身体的な活動を体制化していく。
第1段階 (0～1ヶ月)	生得的なスキーマの同化と調節
第2段階 (1～4ヶ月)	第1次循環反応
第3段階 (4～10ヶ月)	第2次循環反応
第4段階 (10～12ヶ月)	2 次的スキーマの協応
第5段階 (12～18ヶ月)	第3次循環反応
第6段階 (18ヶ月～2 歳)	洞察の始まり
II 期：前操作期 (2 歳～7 歳)	子どもは考えること－シンボルと内的イメージを使うこと－を学ぶ。思考は非組織的であり、おとなの思考とは異なる。
III 期：具体的操作期 (7 歳～11 歳)	子どもは組織的に考えるようになるが、具体的な対象や活動に照らすことができる場合に限ってである。
IV 期：形式的操作期 (11 歳～成人)	純粹に抽象的で仮言的なことでも組織的に考えることができるようになる。

見立て遊びやイメージの形成が可能となるが、そういうことと共に意味や文

法の獲得も可能になる——そのようにピアジェは考えていました (Karl-

mloff-Smith, 1992)。

3 ピアジェ理論へのチャレンジ

ピアジェの理論は難解だと言われませんが、一方で、発達段階や一般知能という考えはシンプルであり、分かりやすくもあります。ピアジェの洞察力が卓越していたというのはもちろんのことですが、そういったシンプルさも、ピアジェの理論が世界で広く受けいられてきた理由のひとつだと考えられます (Siegler, 1995)。

しかし、それだけ影響力をもつものであるからこそ、チャレンジの対象にもなるでしょう。ここ一〇年間の間に、ピアジェの説に対抗する様々な知見が蓄積してきました。

そのようなチャレンジの多くは、乳幼児はピアジェが考えていたよりも、ずっと以前から様々な能力を発揮しているようだということ、そしてそういった能力は一般知能に支えられている

というよりも、むしろ言語や空間認識など、限られた領域における局所的な知識であることが多いらしいということとです。

たとえばスペルキは、注視法を用いて、生後数カ月の乳児であっても事物の因果性に関する感受性を有していることを示しています (Spelke, 1995)。

図1左図のような装置を赤ちゃんの前に提示します。この装置では、まず黒い事物がついたての中に入っており、その後白い事物が出てきます。

成人の場合、これは黒い事物がついたての後ろで白い事物をつき動かしたのだと推論するでしょう。乳児の場合も、同様の推論をしているらしいということを示しました。

図1左図の事物の動きに馴化させた後(つまり何度も提示して馴れさせた

後)、中または右のテスト図を提示すると、赤ちゃんは中図よりも右図をより長く注視するのです。

この結果を、乳児にとつて中図は特に新しく興味をそそるものではなかった、赤ちゃんは右図の方が「めずらしい」と感じたのでたくさん見たのだと解釈するならば、赤ちゃんは左図の事物の動きを中図のように解釈していたと考えることができるでしょう。

ピアジェによれば、事物の永続性の達成は、シンボルの獲得につながる一歳すぎのこととなっていますから、スペルキの示したことが解釈通りだとすれば、ピアジェは乳児の能力をかなり低く見積もっていたことになるでしょう。

乳幼児が他にも様々な知識をもっていることが、注視法によって明らかにされています。

スペルキは因果性だけでなく、軌跡の連続性(事物は連続した軌跡を描

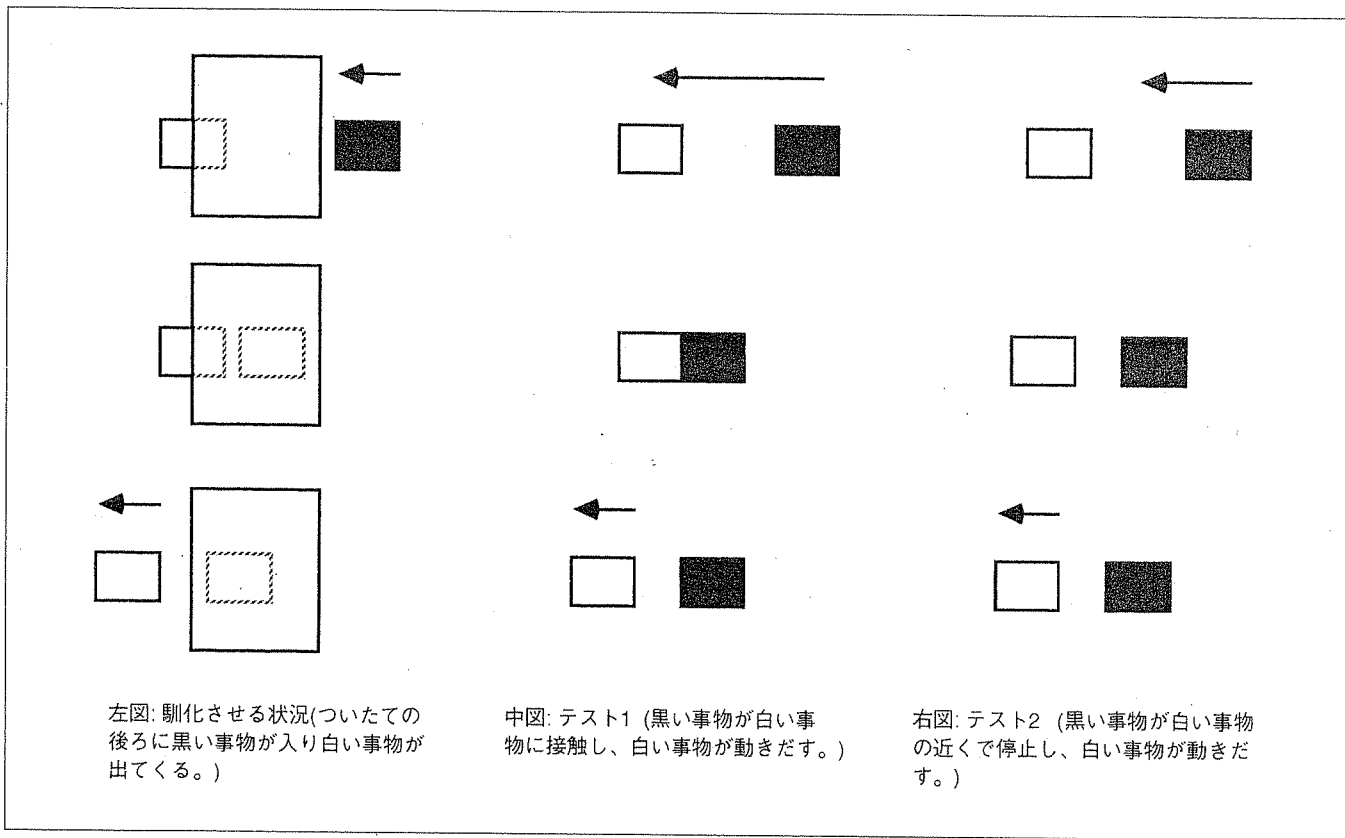


図1 スペルキの実験(Spelke, 1995 より)

く)や、接触の法則(ふたつの事物は接触した時にだけ互いに影響を及ぼす)などへの感受性が存在すること、しかし乳幼児は必ずしも慣性や重力に関する感受性もっていないこと、また、接触の法則を心理的な事柄(接触がなくてもある個人は別の個人を動かせる)には適用しないことなどを明らかにしています。

またケアリは、乳幼児が個物に関する概念(自動車のおもちゃとそれに接触しているアヒルの人形とを区別する)や、おはじきなど数えられる事物と流体など数えられない事物との区別を有しているらしいこと、しかし一、二、三といった数列に対する感受性はもっていないらしいことなどを示しています(Carey, 1997)。

このような知見は、乳児に限られた領域において、かなり洗練された知識をもっていることを示唆しています。

このような知識の存在は、より大き

い子どもたちにも見いだされていきます。たとえばマークマンは、言語獲得期にある幼児が、事物の命名に関していくつか固有の知識をもっていると考察しています。

例えばお父さんと動物園に行った幼児が、お父さんから「あれがトラだよ」と教えられたとします。お父さんが「あれ」と指した先には檻があつて、その隙間から後ろむきのトラもようの毛皮としっぽが見えて、その向こうは灰色の壁になっていたとしても、幼児は檻や毛皮や縞模様やしつ

4 発達観の変化と含意

こういった知見は様々な対象について見出されており、その集積から、ピアジェの理論に代表される一般知能や段階説にも、見直しが求められています。

では、ピアジェの理論に代わる発達

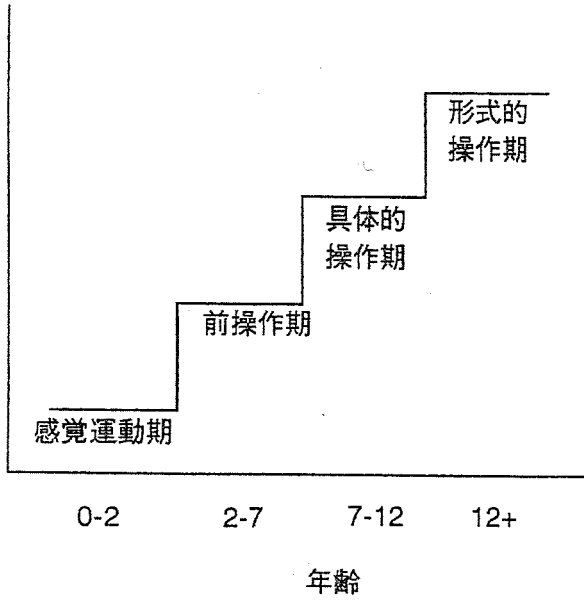
観を「トラ」だとは解釈せず、檻の中にいる動物全体を「トラ」だと理解する、そしてお父さんが指した特定の虎だけでなく、檻の中にいる他の虎もまた「トラ」だと解釈するというのです。

あいまいな指さしと命名だけでも、幼児が指示対象を的確に把握することができるのは、語彙獲得にとつて重要な情報だけを選んで処理するための知識を、幼児がもっているからだろうとマークマンは考察しています(Markman, 1992)。

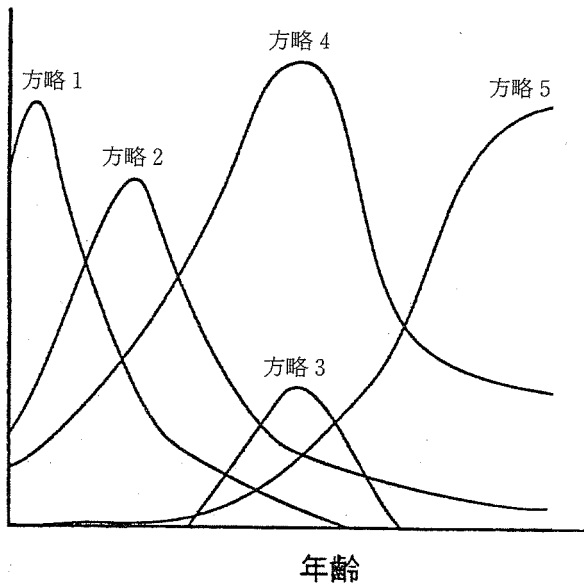
観とはどのようなものでしょうか。多くの研究者が、一般知能の発達段階は否定しつつも、やはり「〇〇歳で△△が可能になる」というような発達段階説をとっています。

けれどもスペルキのように、事物の

永続性や因果性など、中核となる知識がすでに乳幼児期から備わっており、それがより豊かになることで発達が進むという人もいますし (Spelke, 1995)、またシーグラーのように、時



に応じて優位な方略が波のように変化するという見方をする人もいます (Siegler, 1995) (図2参照)。子どもと継時的に関わったことのある人ならば、変化は—速い遅いはあつ



ても—刻々と進むものであり、観察や調査は、その流れの一瞬をパラロイドで撮影するようなものだということを知っているでしょう。特定の行動や課題ができるかできな

図2 ピアジェの発達段階モデル (上) とシーグラーの波状モデル (下) (Siegler(1995)より)

いかは、必ずしも他の行動や課題成績によつて予測することはできず、また予測できたとしても、実際には体力や気力、経験や関心など様々な変数による影響もあつて、一定ではありません。

新しい知見を取り入れた統一的な発達観の枠組の形成には、まだしばらくかかるでしょうし、またすべての人がその枠組に満足できるとは、到底言えそうにありません。

けれども、この時点でひとつ言えることは、こういった最近の知見によれば、乳幼児の発達は単線的な「〇歳でこうなる」式の仕方では捉えられないことが、ますます明らかになってきたといふことでしょう。

その複雑な発達の過程を見通すには、様々な角度から幼児を観察する目と、発達の背後にある力に関する豊かな想像力とが必要なのだと思います。

参考文献

- Carey, S. (1997). Do constraints on word meanings reflect prelinguistic cognitive architecture? 認知科学 (Cognitive Studies : Bulletin of the Japanese Cognitive Science Society), 4(1), 35-57.
- Crain, W. C. (1981). Theories of development : Concepts and application. New Jersey : Prentice-Hall. (小林芳郎・中嶋実(監) '一九八四「発達の理論」田研出版')
- Karniloff-Smith, A. K. (1992). Beyond modularity : A developmental perspective on cognitive science. Cambridge : The MIT Press.
- Markman, E. M. (1992). Constraints on word learning : Speculations about their nature, origins, and domain specificity. In M. R. Gunnar & M. Maratos (Eds.), Modularity and constraints in language and cognition, (Vol. The Minnesota Symposia on Child Psychology, pp. 59-101). Hillsdale : Laurence Erlbaum Associates.
- Siegler, R. S. (1995). Children's thinking : How does change occur? In F. E. Weinert & W. Schneider (Eds.), Memory performance and competencies : Issues in growth and development, (pp. 405-430). New Jersey : LEA.
- Spelke, E. (1995). Initial knowledge : Six suggestions. In J. M. a. S. Franck (Ed), Cognition on cognition, (pp. 433-447). Cambridge : MIT Press.
- Markman, E. M. (1992). Constraints on word learning : Speculations about their nature, origins, and domain specificity. In M. R. Gunnar & M. Maratos (Eds.), Modularity and constraints in language and cognition, (Vol. The Minnesota Symposia on Child Psychology, pp. 59-101). Hillsdale : Laurence Erlbaum Associates.